

## Chalk はなぜ不可算名詞なのか (3)

—— 日本語と英語における「関係性」の捉え方の違いについて ——

### Why is ‘chalk’ an uncountable noun? (3)

塩 濱 久 雄

キーワード：英語、可算名詞・不可算名詞、日本語

#### 0. はじめに

Chalk という英語の名詞は、固体の筆記用具を指す場合と、それが粉状になったものを指す場合と、運動場に線を引くのに用いられる液体を指す場合などがあるが、その材料は基本的に共通でその形状のみが異なる。このような場合英語では不可算名詞扱いとなるが、日本語では筆記用具の「チョーク」はそれ自体が、鉛筆のように「一本、二本」と数えられるので、日本語話者は英語の chalk もそのようなものであると考えて可算名詞扱いすることがよくある。

筆者は、拙論「Chalk はなぜ不可算名詞なのか (1)、(2)」で、これは「部分 (筆記用具の chalk)」が chalk という名詞であらわされるもの「全体 (たとえば、液状や粉状のものなどをも含む)」との関係性において捉えられていないことが原因であると述べた。

本稿では、その「部分」と「全体」の「関係性」という考えを、可算名詞、不可算名詞という枠を超えて、文章中の語と語、あるいは文と文との「関係性」に広げ、日英の違いを例証する。

村上春樹『羊をめぐる冒険』に「写真には羊の群れと草原が写っていた」という文がある。この文を読んだ日本語話者は通例、「草原に羊がいる」様子を撮った写真であると理解する。しかし、たとえば、一枚の写真に上下二つの場面が写っていて、上半分に「羊の群れ」だけ、下半分に「草原」だけ、という写真であっても、「写真には羊の群れと草原が写っていた」と言えるはずである。つまり、日本語は「羊の群れ」と「草原」の「関係性」を言語的には表現していないのである。「草原に羊がいる」と解釈するのは言語外の要素に拠っているのである。この部分の英訳は The photo showed a flock of sheep on a grassy meadow となっている。これを和訳すれば「その写真には草原の上の一群の羊が写っていた」となる。つまり、英訳では「羊の群れ」と「草原」の「関係性」が前置詞 on によって言語的に表現されているのである。

以下は、村上春樹の作品とその英訳から採られたもので、原文では言語的に「関係性」が示

されていないが、英訳において、なんらかの「関係性」が示されている例である。

1. 1. には、その「関係性」が筆者にも理解できるもの、1. 2. には、その「関係性」が筆者には理解できないものを列挙した。例外として1. 3. には、原文で「関係性」が表されているが、英訳に「関係性」が表されていないものを挙げた。

なお、例文末尾の『羊』は『羊をめぐる冒険』の、『ダンス』は『ダンス、ダンス、ダンス』の、『世界』は『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の略である。

## 1. 日英比較例

1. 1. 原文に「関係性」が表されていないが、英訳で表されていて、筆者にもその「関係性」が理解されるもの。

僕が帰り際に黙って頭を下げると、彼も黙って頭を下げた。『羊』(13)

On leaving, I lowered my head in silence, and he lowered his head in return, without a word.  
(4)

(コメント)

「彼も黙って頭を下げた」が he lowered his head in return, without a word と訳され、in return (お返しに) が追加され「関係性」が表されている。

(類例)

男はメモにとった事項を電話口で読みあげた。『羊』(198)

The man read back the items from his notepad. (171)

(コメント)

英文を和訳すると、「その男はメモから項目を読みあげて返した」と訳され、「電話口で」が省略され、back が追加されている。

ばたばたという音を立てて地面から二羽の鳥がとびたち、雲ひとつない空に吸い込まれるように消えていった。『羊』(19)

Two birds flew off from nearby and were swallowed up into the cloudless sky. (9)

(コメント)

「地面から」が from nearby (近くから) と訳されている。「地面」だけでは、どこの「地面」でも良いので、原文では登場人物との「関係性」が表現されていないことになる。

石鹸もシャンプーもシェービング・クリームも、何もかもがなくなりかけていた。『羊』(33)

I was down to the bottom on just about everything—soap, shampoo, shaving cream. ‘(23)

(コメント)

原文は単に、こういった品物が「なくなりかけていた」とあり、極端に言えば、世界中から「なくなりかけていた」とも理解できる。英訳では「僕」とこういった品物との「関係性」が表現されている。

あるカーブはあらゆる想像をこえた大胆さで画面を一気に横切り、あるカーブは秘密めいた細心さで一群の小さな翳を作りだし、あるカーブは古代の壁画のように無数の伝説を描きあげていた。『羊』(47)

One astonishingly bold curve cut clear across the picture plane, others curled into delicate filigrees of subtle shadow, while still others traced, like an ancient mural, the legends of a past age. (34)

(コメント)

原文では「あるカーブ」が三回繰り返されているが、英訳では one, others, still others と三つの節のあいだの「関係性」を念頭に置いたものになっている。

「それでは四時に車をよこします」『羊』(85)

“I shall send a car here for him at four o'clock.” (65)

(コメント)

原文にはない for him (彼のために) が追加されている。

著作集を出しているわけでもないし、人前で演説をするわけでもない。『羊』(86)

He has no writings to his name, doesn't make speeches in public. (66)

(コメント)

「著作集」が writings to his name (彼の名の著作) と訳されている。

エアコンの風は静かで自然だったし、床に敷きつめられたカーペットは柔らかかった。『羊』(95)

The air conditioning was unobtrusive and natural, the carpeting sumptuous. (76)

(コメント)

「静か」が unobtrusive (でしゃばらない、控え目の) と訳されていて、「この場の状況」と「エアコンの風の音」とのあいだの「関係性」が表されている。

僕はすることもないうまま二杯めのコーヒーを飲みながら、ピアノを弾いている女の子をぼんやりと眺めていた。『羊』(137)

Since I had nothing better to do, I had a second cup of coffee and watched the piano player.

(113)

(コメント)

「することもない」が *had nothing better to do* (よりよいすることがない) と比較級を用いて訳されていて、他の選択肢とのあいだの「関係性」が表されている。

(参考例)

「構いませんよ。どうせ今日は一日何もすることがないんです」『羊』(138)

“No problem. I didn’t have anything to do today, anyway.” (114)

(コメント)

「することがないんです」が *didn’t have anything to do* (することがなにもなかった) と訳されている。

我々は正直に語り合う。そして真実に一歩でも近づく。『羊』(125)

By discussing matters in all honest, we shall proceed one step at a time closer to the truth. (125)

(コメント)

英文を和訳すると、「正直に語り合うことによって、我々は一歩ずつ真実に近づく」となる。二つの文のあいだの「関係性」が表されている。

「仕事って、どんな仕事なんですか？」と僕は訊いてみた。

「設計事務所よ。もうずいぶん長いわ」『羊』(139)

“What sort of work?” I ventured to ask.

“Drafting work at an architectural office. I’ve been there for a long time now.” (115)

(コメント)

「設計事務所よ」が *Drafting work at an architectural office* (建築事務所の設計をする仕事) と訳されている。質問と答えの「関係性」が表されている。

(類例)

「わかりませんね」と僕は言った。「そういった設問自体が適当なのかどうかはわからない」

「君は頭がいい」と男は言って膝の上で指を組んだ。『羊』(165)

“I wouldn’t know,” I said. “I don’t know if the question itself makes sense.”

“An intelligent answer,” said the man, folding his fingers together on his lap. (140)

(コメント)

「君は頭がいい」が “An intelligent answer,” (「利口な答えだ」) と訳されている。上の例と同じく、質問と答えの「関係性」が表されている。

生きていること自体が不可解なのに、どうしてそんなことがわかる？ 『羊』 (161)

Did they really imagine they could uncover something of that order when the more basic fact of his living remained a mystery? (1369)

(コメント)

英文を和訳すると、「より基本的な彼が生きているという事実が不可解なのに、そのレベルのことが理解できているのだろうか」となる。「生きていること」と「そんなこと」とのあいだの「関係性」が英訳では表されている。

目を閉じていると、何百人もの小人がほうきで頭の中を掃いているような音がした。『羊』 (176)

With my eyes closed, I could hear hundreds of elves sweeping out my head with their tiny brooms. (151)

(コメント)

「ほうき」が tiny brooms (小さなほうき) と訳され、tiny が追加され、「小人」と「ほうき」のあいだの「関係性」が表されている。

金ならいくらでもあるんだから。『羊』 (226)

We've got more than enough money. (196)

(コメント)

英文を和訳すると「十分以上の金がある」となる。「金額」と「状況」とのあいだの「関係性」が表されている。

(類例)

前にも申しましたように父親は緬羊会館の館長を勤めておりましたし、なにしろ羊に関することなら何でも知っているんです。『羊』 (243)

As I said before, he was the former director of Ovine Hall, and anyway he knows all there is to know about sheep. (210)

(コメント)

「羊に関することなら何でも知っている」が he knows all there is to know about sheep (羊に関して知られるためにあることはすべて知っている) と訳されている。

それは職務逸脱行為であるとは思わないのか？ 『羊』 (247)

Do you not think that is sufficient reason for dismissal from your offices? (214)

(コメント)

英文を和訳すると、「それは免職の十分な理由になると思わなかったのか？」となる。「職務逸

脱行為」と「本人」とのあいだの「関係性」が英訳では表されている。

(類例 1)

羊博士は肯いてロールパンの最後のかけらを口につっこむとぱたぱたと手をはたいた。『羊』(257)

The Sheep Professor nodded as he popped the last morsel of his roll into his mouth and brushed the crumbs from his hands. (223)

(コメント)

「ぱたぱたと手をはたいた」が brushed the crumbs from his hands (手からパンくずを払った) となり、「手をはたいた」という動作と「本人」とのあいだの「関係性」が英訳では表されている。

(類例 2)

そして合議の末、東に進むことになった。『羊』(271)

By consensus, it was decided they should head east. (235)

(コメント)

「合議の末」が by consensus (納得ずくで) と訳されている。

ノートの左側に十二滝町の歴史を、右側に日本史上の主な出来事を書き込んだ。『羊』(282)

On the left side of the page, I listed dates and developments in the history of Junitaki-cho and on the right the major events in the history of Japan in the same period. (246)

(コメント)

英文を和訳すると、「ページの左側に十二滝町の歴史における日付や発展を、右には同じ期間における日本史上の主な出来事を書き込んだ」となり、in the same period が追加され、左右のページのあいだの「関係性」が表されている。

まるで絆創膏をむしり取るような感じでページをめくった。『羊』(282)

He turned the pages as slowly as if he were peeling away adhesive tape. (247)

(コメント)

英文を和訳すると、「彼はまるで絆創膏をむしり取るようにゆっくりとページをめくった」となり、slowly が追加されている。原文は「絆創膏をむしり取る」様子と、「ページをめくる」動作を並べているだけであるが、英訳はそれが「ゆっくり」を表していると考えて訳出している。

(類例)

閉鎖されたスケートリンクのようなロータリーには町の案内板が立っていたが、殆どの文字は風雨にさらされて判読できなかった。『羊』(287)

The guide to the town, posted next to the deserted rotary, was so weathered you could barely make it out. (251)

(コメント)

「閉鎖されたスケートリンクのような」が deserted (人気のない) と訳されている。

林を抜けると丘の斜面に細長い牧舎が見え、家畜の匂いがした。『羊』(293)

Emerging from the woods, I came upon a narrow building on the face of the hill, and with it the smell of livestock. (257)

(コメント)

「家畜の匂いがした」が with it the smell of livestock (それとともに家畜の匂い) と訳されている。英訳では「牧舎」と「家畜の匂い」のあいだの「関係性」が表されている。

どこまでも白樺の林がつづき、どこまでもまっすぐな道がつづいていた。『羊』(314)

The road seemed endless, like the birch forest around it. (276)

(コメント)

英文を和訳すると、「道路はどこまでもつづいていた。そのまわりの白樺の林のように」となる。「道路」と「白樺の林」とのあいだの「関係性」が表されている。

羊男は何かを知っている。それは確かだった。『羊』(350)

The Sheep Man knew something. That much was certain. (308)

(コメント)

英文後半を和訳すると、「そこまでは確かだった」となり、程度が表現され、状況との「関係性」が表されている。

僕が文章を書き、カメラマンが写真を撮る。全部で五ページ。『ダンス』(上31)

I'd write the story up, he'd supply the photos, for a total of five pages. (7)

(コメント)

「写真を撮る」が supply the photos (写真を補う) と訳され、「文章」と「写真」のあいだの「関係性」が表されている。

別れた妻からの手紙も来た。手紙には幾つかの実際的な用事が書いてあった。『ダンス』(上35)

My ex-wife wrote, needing some practical affairs taken care of. (9)

(コメント)

英文を和訳すると、「前妻が、幾つかの実際的な用事を処理する必要があったので手紙を書い

てきた」となり、手紙とその内容とのあいだの「関係性」が表されている。

この段階では我々は取材であることを隠している。写真も写さない。『ダンス』(上52)

We're still undercover at this stage, so no picture taking. (17)

(コメント)

英文を和訳すると、「この段階では我々はまだ身分を明かしていないので、写真をとらない」となり、二つの文のあいだに「関係性」を見ている。

カウンター席で女が何かを言い、男がまた笑った。『ダンス』(上104)

A woman at the counter said something, which drew another laugh from her companion. (44)

(コメント)

原文にない、which drew (それが引き起こした) が追加されている。「何かを言う」ことと「笑う」こととのあいだに「関係性」を見ている。

(類例)

ユキはくすくす笑った。『ダンス』(下142)

That drew a chuckle from her. (267)

(コメント)

英文を和訳すると、「それが彼女からくすくす笑いを引き出した」となり、「関係性」が表されている。

A 総業は政界にも巨大なパイプを持っていた。記者はもっと先まで追及した。『ダンス』(上123)

A Enterprises had a direct pipeline to certain political circles, which prompted the reporter to pursue this line of investigation further. (53)

(コメント)

英文を和訳すると、「A 総業はある政治的サークルに直接のパイプを持っていた。そのことが記者にさらに調査させた」となり、「関係性」が表現されている。

打ち付けられてからずいぶん年月がたっているのだろう。板の隙間に灰色のほこりが積もり、釘の頭が錆びている。『ダンス』(上169)

Boarded up a long time ago, if the rusty nails and gray dust in the cracks of the boards were any indication. (80)

(コメント)

英文を和訳すると、「錆びた釘や、板の隙間の灰色のほこりがしるしとなるのであれば、かな



り前に打ち付けられたことになる」となる。訳者は二つの文のあいだに「関係性」を見ている。

「ここのステーキ悪くないだろう」と彼は言った。

「悪くない」と僕は言った。『ダンス』(上285)

“Mmm, not bad,” he said.

“Not bad at all,” I seconded. (140)

(コメント)

「僕は言った」が I seconded (僕は賛成した) と「関係性」を念頭に置いて訳されている。

頭の中が真っ白になっちゃうんです。強烈な集中力です。『ダンス』(下83)

Her mind goes blank from concentrating so intensely. (242)

(コメント)

英文を和訳すると、「強烈な集中力のせいで頭の中が真っ白になっちゃうんです」となり、二つの文のあいだに「関係性」を見ている。

五反田君はごく普通のグレーのVネックのセーターに、ごく普通のブルーのボタン・ダウンシャツに、ごく普通のコットン・パンツをはいていた。でもそれでも彼は目立った。エルトン・ジョンが紫の上着にオレンジ色のシャツを着てハイジャンプしているのと同じくらい目立った。彼は僕の部屋のドアをノックし、僕がドアを開けるとにっこりと笑った。『ダンス』(下183)

He was wearing a perfectly normal gray V-neck sweater over a perfectly ordinary blue button-down shirt over a perfectly ordinary cotton slacks. And still he looked striking. Extraordinarily so. (285)

(コメント)

英訳ではセーターとシャツの「位置関係」が表現されている。

ビールがなくなるとカティー・サークを飲んだ。『ダンス』(下186)

When the beer ran out, we switched to Cutty Sark. (286)

(コメント)

英文を和訳すると、「ビールがなくなるとカティー・サークに替えた」となり、「ビール」と「カティー・サーク」のあいだの「関係性」が表されている。

結局その日は一度も車に乗らなかった。昼のあいだ街を散歩し、映画を見て、本を何冊か買った。『ダンス』(下203)

In the end, I left the car alone that day. Instead, I walked, saw a movie, bought some books.

(294)

(コメント)

英訳では、二つの文が *instead* (代わりに) で結ばれ、「関係性」が表されている。

とても良い天気だった。僕はアロハ・シャツを着て、サングラスをかけていた。『ダンス』(下221)

The weather was clear and warm, so I was wearing an aloha shirt and sunglasses. (303)

(コメント)

二つの部分が *so* で結ばれ、「関係性」が表されている。

僕がコーヒーを持っていくと、アメとユキは寄り添うように並んでソファに座っていた。『ダンス』(下243)

I carried in the coffee and found Ame and Yuki sitting on the sofa. (314)

(コメント)

英文を和訳すると、「コーヒーをもって部屋に入ると、僕はアメとユキは寄り添うように並んでソファに座っているのを見つけた」となり、「僕」と「アメとユキ」の「関係性」が表されている。

人が一人死んだからでしょう。『ダンス』(下285)

Someone close to you has died. (334)

(コメント)

英文を和訳すると、「あなたに近い人が亡くなった」となり、原文にない *close* が追加されて、「関係性」が表されている。

僕はルーム・サービスで夕食を取り、冷蔵庫からビールを出して飲んだ。『ダンス』(下371)

I had room service bring up dinner, which I accompanied with a beer from the mini-bar. (376)

(コメント)

英文を和訳すると、「僕はルーム・サービスに夕食をもってこさせ、それに冷蔵庫からビールを添えた」となる。「夕食」と「ビール」のあいだの「関係性」が表されている。

僕はもう一度ルーム・サービスに電話をして、アイスバール一杯分の氷を注文した。彼女はまたバスルームに隠れた。『ダンス』(下391)

I called room service for a bucket of ice, making Yumiyoshi hide in the bathroom again. (385)

(コメント)

二つの文が *making* (～させた) でつながれ、二つの文のあいだの「関係性」が表されている。

背景音楽が必要だったので、枕元の有線放送のスイッチをいれ、チャンネルを「ポピュラー音楽」というのにあわせた。マントヴァーニ・オーケストラが「魅惑の宵」を麗々しく奏でていた。言うことない、と僕は思った。『ダンス』(下391)

I switched on the bedside Muzak and punched the Pops channel. Soon we were treated to the lush strains of Mantovani playing «Strangers in the Night.» You didn't hear me making snide comments. (385)

(コメント)

「マントヴァーニ・オーケストラが「魅惑の宵」を麗々しく奏でていた」が *Soon we were treated to the lush strains of Mantovani playing «Strangers in the Night.»* (すぐに僕たちはマントヴァーニ・オーケストラの「夜のストレンジャー」の豪華な演奏を与えられた) と訳され、「僕たち」と「魅惑の宵」とのあいだの「関係性」が表されている。

『男とエレベーター』『世界』(上14)

*Man in Elevator.* (3)

(コメント)

英文を和訳すると、「エレベーターの中の男」となり、「男」と「エレベーター」のあいだの「関係性」が表されている。

これまでのところ、彼らはおそろしく神経質で用心深く、几帳面だった。『世界』(上19)

Not after *they* had been so meticulous up to that point. (5)

(コメント)

英文を和訳すると、「彼らはこれまでのところとても注意深かったのだからありえない」となり、結果との「関係性」が表されている。

東の森に行くといいとねりこがはえているんだ。(上39)

The Eastern Woods is my ash stock. (16)

(コメント)

英文を和訳すると、「東の森が俺のとねりこがはえているところだ」となり、「俺」と「とねりこ」のあいだの「関係性」が表されている。

管理人はそう言って畑を見まわした。畑のまわりを森が壁のように高く囲んでいた。畑の黒い土は丁寧に整えられていたが、そこにはまだ作物の姿はなかった。『世界』(下142)

The caretaker shifts his gaze about the clearing. We are walled in by tall, dark forest. The soil is black and tilled, but there is no sign of plantings. (280)

(コメント)

「畑のまわりを森が壁のように高く囲んでいた」が We are walled in by tall, dark forest (私たちは高く暗い森に壁のように囲まれていた) と訳されている。この部分だけを、全体との「関係性」を考えずに読むと、「(私たちのいるところとは別のところの) 畑のまわりを森が壁のように高く囲んでいた」ともとれる。

(類例)

深い沈黙が洞窟の中を支配した。『世界』(下152)

A profound silence fell over us.

(コメント)

英文を和訳すると、「深い沈黙が我々の上に降りた」となる。この場合も「(私たちのいるところとは別のところの) 深い沈黙が洞窟の中を支配した」ともとれる。

寝室には窓がなかったので、ドアを閉めると風音が小さくなった。(下165)

There is no window, so with the door closed, the wind-cry is less intrusive.

(コメント)

「小さく」が less intrusive (よりじゃまにならない) と訳されている。「風音」と「部屋」のあいだの「関係性」が表されている。

(参考例)

発電所から遠ざかるにつれて風音は少しずつ弱まり、森の出口に近づくころには消えた。(下171)

Gradually, the wail of the wind weakens as we walk farther from the Power Station. At the entrance to the Woods, we do not hear it at all.

「穴なんてないみたいだな」と私は言った。(下181)

“I don’t see a hole,” I said.

(コメント)

英文を和訳すると、「『私には穴は見えない』と私は言った」となる。原文は「穴がない」という事実を述べているが、英訳は「私」と「穴」とのあいだの「関係性」を表している。

コンクリートが深くえぐりとられ、鉄の棒がすっぽりと抜きとられていた。(下206)

The concrete was gouged where an iron bar had been ripped out.

(コメント)

英文を和訳すると、「鉄の棒が抜きとられているところでコンクリートがえぐり取られていた」となる。原文では「コンクリートが深くえぐりとられ」ている場所と「鉄の棒が抜きとられている」場所との「関係性」が表されていないが、英訳ではそれが表されている。

## 1. 2. 原文に「関係性」が表されていないが、英訳で表されていて、筆者にはその「関係性」が理解できないもの。

手袋で机の上のほこりを払うようなしゃべり方だった。『羊』(79)

He spoke as if running a white-gloved hand over a tabletop. (60)

(コメント)

英文を和訳すると、「彼はまるで白い手袋をはめた手を机の上を走らせるように話した」となる。原文には「白い」はない。筆者の読みでは、この場合の「手袋」は手にはめられていなくて、手に持っている状態である。「手」と「手袋」のあいだの「関係性」の取り違えとも考えられる。

夜は川原に天幕を張り、狼の声を聞きながら眠った。『羊』(271)

At night, they spread their tarps over the riverbank and kept an ear out for the howling wolves while they slept. (235)

(コメント)

英文を和訳すると、「夜になると、彼らは防水シートを川原に広げ、寝ている間も吠える狼に耳をそばだてていた」となる。筆者の読みでは、単に「狼の声が聞こえているだけ」である。「関係性」の取り違えとも考えられる。

魚の姿はなく、よどみの水面には何枚かの枯葉がゆっくりと円を描いていた。『羊』(351)

There was no sign of fish, though a few fallen leaves traced slow circles on the surface of the pools. (309)

(コメント)

原文の前半と後半が、英訳では *though* (ではあるが) で結ばれている。筆者の読みでは、原文にこの「関係性」はない。

久し振りに気持ちの良いのんびりとした昼食だった。近くの林でアカゲラの鳴く声が聞こえた。『羊』(362)

A great lunch, complete with a woodpecker calling from the nearby woods. (318)

(コメント)

英文を和訳すると、「素晴らしい昼食で、近くの林からのキツツキの鳴き声も添えられていた」となり、英訳では「昼食」と「アカゲラの鳴く声」の間に「関係性」を見出しているが、筆者にはその「関係性」は見えない。1. 1. の『ダンス』(下371)の例と比較。

(参考例)

僕はルーム・サービスで夕食を取り、冷蔵庫からビールを出して飲んだ。『ダンス』(下371)

I had room service bring up dinner, which I accompanied with a beer from the mini-bar. (376)

町は死んだように静かだった。老人が一人、シャベルでロータリーの雪をかきわけていた。やせた犬がその隣で尻尾を振っていた。『羊』(395)

The town was dead still. Except for an old man shoveling away the snow from the rotary and a gangly dog sitting nearby wagging its tail. (347)

(コメント)

英文を和訳すると、「一人の老人がシャベルでロータリーの雪を除けていて、ひよろ長い犬がそばに座って尻尾を振っているのを除いて、町は死んだように静かだった」となり、「町の様子」と「老人の雪かき」のあいだに「関係性」があるように訳されているが、筆者にはその「関係性」は見えない。

階数表示のデジタル数字が1、2、3、4、5、6、と上昇した。ゆっくりと、しかし確実にそれは近づいてきた。僕は「恋は水色」を聞きながらその数字を眺めていた。『ダンス』(上142)

The digital display registered the floors—1, 2, 3, 4, 5, 6—slowly but surely advancing, to the rhythm of the music. (64)

(コメント)

英文を和訳すると、「デジタルディスプレイが階数を表示した—1、2、3、4、5、6—。ゆっくりとしかし確実に音楽のリズムに合わせて上昇した」となる。英訳では「音楽のリズム」と「上昇」のあいだに「関係性」を見ているが、筆者の読みではそのような「関係性」はない。

でも僕はまだ体をこわばせたままじっと白いスクリーンを睨んでいた。『ダンス』(上213)

I remained in my seat, transfixed by the blank white screen. (102)

(コメント)

英文を和訳すると、「僕は白いスクリーンに釘付けにされ、座席にそのままだった」となり、「白いスクリーン」と「釘付け」との間の「関係性」が表されている。ただし、筆者の読みで

は「関係性」はない。

彼女はボールペンの頭で机をとんとんと叩いただけで僕の質問には答えなかった。『ダンス』(上219)

She tapped her pen on the countertop in lieu of a response. (105)

(コメント)

英文を和訳すると、「彼女は返答の代わりにカウンターの上でペンをとんとんと叩いた」となり、質問に対する返答として「叩いた」ことになっているが、筆者の読みではこの「関係性」はない。

懐かしきモダネアーズが懐かしきトミー・ドーシーの歌を歌った古いレコードを小さな音でかけた。僕の頭みたいに少し時代遅れだった。そしてノイズも入っていた。でも誰にも迷惑はかけない。『ダンス』(上252)

I put on an old favorite of the Modernaires singing Tommy Dorsey numbers. Nice and low. A bit out-of-date, like my head. A bit scratchy, but not enough to bother anyone. (123)

(コメント)

最後の「そしてノイズも入っていた。でも誰にも迷惑はかけない」が A bit scratchy, but not enough to bother anyone (少し針音がするが人に迷惑をかけるほどではない) と訳されていて、訳者は「ノイズの程度」と「迷惑」のあいだに「関係性」を見ているが、筆者の読みでは、「時代遅れでノイズも入っている古いレコード」をかけることが「誰にも迷惑はかけない」と言っているのである。

僕らはハワイのイノセントな太陽や波や風やピナ・コラーダについてしばらく話した。少しおなかが減ってきたとユキが言うので、近くのフルーツ・パーラーに入ってフルーツ・パフェとパンケーキを食べた。『ダンス』(下232)

We talked about the good times we had in Hawaii. Sun and surf and tropical breezes and Pina Coladas. Yuki said this made her hungry, so we went to eat pancakes and fruit parfaits. (308)

(コメント)

「おなかが減ってきたとユキが言う」が Yuki said this made her hungry (これが彼女のおなかを減らせたユキが言った) となり、「ハワイの話」がユキに空腹感を与えたことになって「関係性」が表されているが、筆者の読みではこの「関係性」はない。

いいですか、僕という人間が虫めがねで見なきゃよくわからないような存在であることは自分でも承知しています。昔からそうでした。学校の卒業写真を見ても自分の顔を見つけるのにす

ごく時間がかかるくらいなんです。『世界』(下128)

Listen. I may not be much, but I'm all I've got. Maybe you need a magnifying glass to find my face in my high school graduation photo.

(コメント)

英訳では、卒業写真で自分を探すのに「虫めがねで見なきゃよくわからない」というふうになっているが、筆者の読みではこの「関係性」はない。

一角獣も塀もほしくない。『世界』(下129)

I don't want any unicorns behind fences. (273)

(コメント)

英文を和訳すると、「塀のうしろの一角獣はほしくない」と訳され、「一角獣」と「塀」のあいだの「関係性」が表されているが、筆者の読みではこの「関係性」はない。

### 1. 3. 原文には「関係性」が表されているが、英訳でその「関係性」が表されていないもの。

言い換えれば、英訳者が原文に「関係性」を見いだせなかった例である。

ドアが自動的にしまったが、それでも僕はじっと壁にもたれていた。『ダンス』(上187)

The door closed. I did not move. (87)

(コメント)

この場面は、「僕」が羊男の部屋を出て、エレベーターの中に入った直後の描写で、直前の文章は「そして音もなくドアが開き、明るく柔らかな光が廊下にこぼれて僕の体を包んだ。僕はエレベーターの中に入り、しばらく壁にもたれてじっとしていた」である。訳者には「ドアが自動的にしまった」ことと「僕はじっと壁にもたれていた」の間に「が、それでも」で表される関係があるようには思えなかったようであるが、筆者の読みでは原文は「ドアが自動的にしまったが、それでも（階数を示すボタンを押すことなく）僕はじっと壁にもたれていた」の意である。

## 2. おわりに

本稿で筆者が試みたことは、日本語の文において、言語的には明らかにされていないが、存在すると推測される「関係性」を、英訳者は言語的に表そうとする傾向がある、ということであった。本文中でも指摘したように、筆者には「関係性」が認められない場合でも、英訳者がそこに「関係性」を見えるということもある。また、最後の例にあるように、英訳者が「関係性」を見いだせなかったと思われる場合もある。

いずれにせよ、筆者の考えでは、英語のように「関係性」を言語的に表す方が、「論理的」であるので、日本人が英語に触れて以来の「英語は論理的な言語であるが、日本語はそうでは



ない」という考え方が生まれたのであろう。

「論理的」は英語で *logical* であるが、この語はギリシャ語「ロゴス」が基になっている。ウィキペディアによると、

ロゴス (*logos*) とは、古典ギリシア語の *λόγος* の音写で、

概念、意味、論理、説明、理由、理論、思想などの意味。

キリスト教では、神のことは、世界を構成する論理としてのイエス・キリストを意味する。

言語、論理、真理の意味。転じて「論理的に語られたもの」「語りうるもの」という意味で用いられることもある。

とある。

つまり、「できるだけことばで表すこと」が「論理性」につながるのである。

また、この「関係性」は、英語の物語においては、段落と段落の間、章と章の間にも見いだされ、それが、英語の小説と日本語の小説との構造の違いにも影響を与えている、と筆者は考えている。これについては稿を改めて考察する予定である。

## 引用文献

### (1) 原作

末尾の ( ) 内は、本稿で用いた略。

- 村上春樹 (1982) 『羊をめぐる冒険』(羊) 講談社  
(1985) 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(世界) 新潮文庫  
(1987) 『ダンス・ダンス・ダンス』(ダンス) 講談社文庫

### (2) 英訳

- Haruki Murakami (1989) *A Wild Sheep Chase* (Vintage)  
(1991) *Hard-boiled Wonderland And the End of the World*. (Vintage)  
(1994) *Dance, Dance, Dance* (Vintage)

## 参考文献

- 塩濱久雄 (2007) 『村上春樹はどう誤訳されているか』(若草書房)  
(2007) 『「ノルウェイの森」を英語で読む』(若草書房)  
(2008) 『村上春樹を英語で読む—海辺のカフカ』(若草書房)  
(2008) 「Chalk はなぜ不可算名詞なのか」(神戸山手大学紀要9号)  
(2009) 「Chalk はなぜ不可算名詞なのか(2)」(神戸山手大学紀要10号)